

大学院生によるアメリカの小中学校での 体験型海外教育実地研究報告 XIII

松浦 武人・深澤 清治・松宮奈賀子・渡邊 巧・
西平 由紘*・頼 望直*・青木 理恵*・槇埜 裕子*

(2019年12月9日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students
in Elementary/Secondary Schools in the United States (XIII)

Taketo Matsuura, Seiji Fukazawa, Nagako Matsumiya, Takumi Watanabe,
Yuito Nishihira, Mina Rai, Rie Aoki and Yuko Makino

This paper reports on the overseas teaching practicum in the U.S. and the international forum in which we exchanged ideas on “next-generation global teacher education.” This year, four graduate school students participated in the overseas teaching practicum, and we found the change of their lessons from “information-giving” style in the previous years to “experiencing”, “exchanging”, and “creating” type of lessons this year. The participants reported that it became an excellent opportunity for them to consider a better and comprehensible way to explain something to children since there was “the English barrier”, they noticed the power of visual and other means to convey messages. In the international forum, held earlier in July in Hiroshima, two participants of the previous year’s overseas teaching practicum program reported how their perspectives toward education and the actual lessons had been changed from the experience. The speakers from the U.S. introduced how international exchange at their schools work to broaden the students’ eyes and their global-mind.

Key words : global education, overseas teaching practicum, crosscultural understanding

1 はじめに

本稿は、今年で第13回目を迎えた大学院生によるアメリカ合衆国の小中学校での教育実地研究報告である。広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター（Hiroshima University Global Partnership School Center 以下 GPSC）はグローバル化時代に対応できる教員養成の一助として、広島大学大学院教育学研究科の共通選択科目である「体験型海外教育実地研究」を通して毎年、前期に海外教育実習を企画・実施している。本年度は同研究科専門職学位課程の大学院生4名が参加し、アメリカの小中学校での実習に向けた授業開発、授業発

表に取り組んだ。下記の概要に詳述するように、今年プログラムも例年通り4月当初の参加者募集に始まり、4～8月の事前教材研究、9月15日～22日の現地での教育実地研究（米国ノースカロライナ州グリーンビル市内にある2つの公立小・中学校での授業観察及び教育実習）、広島大学大学院教育学研究科との協定校であるイーストカロライナ大学での大学院授業への参加とローリー市内のチャーター・スクールであるイクスプローリス小学校・中学校での授業見学、校長・教員・生徒ガイドとの交流などを行った。その後、現地でのフィールド調査、そして帰国後の事後研

* 広島大学大学院教育学研究科専門職学位課程

究による教材完成と最終レポートの作成，そして全員による研究成果発表会を実施した。

2 2019年度「体験型海外教育実地研究」の概要

(1) 全体日程

2019年度，本授業科目の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

- 4月9日（火） 本授業の概要と計画説明
- 4月26日（金） 授業研究テーマ事例の考察および渡航のための諸手続きの確認
- 5月24日（金） 授業研究テーマ案の交流・設定
- 6月4日（火） 学習指導案の検討
- 6月25日（火） 学習指導案（英語版）の検討
- 7月13日（土） 第15回学校間交流国際フォーラム参加
- 7月14日（日） 「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップに参加：学習指導案・教材・教具の検討
- 8月1日（水） 学習指導案（英語版）の検討
- 9月4日（水） 授業の準備状況の確認，教材集・報告書・報告会についての確認，渡航に関する書類提出
- 9月9日（月） 渡航前最終打合せ
- 1月21日（火） 「2019年度体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

(2) 渡航・現地での日程

- 9月14日（土） 広島出発，米国ノースカロライナ州ローリー到着
- 9月15日（日） 授業準備および米国の先生方と授業打合せ
- 9月16日（月） グリーンビル現地学校訪問（観察），イーストカロライナ大学施設見学，同大学授業参加，同大学学生との交流
- 9月17日（火） グリーンビル現地学校訪問（授業実施）
- 9月18日（水） イーストカロライナ大学コミュニティスクール見学，ローリーへ移動，ローリー市内（博物館等）研修
- 9月19日（木） イクスブローリス中学校・小学校見学，ワシントンへ移動
- 9月20日（金） ワシントン（スミソニアン博物館等）研修
- 9月21日（土） ワシントン出発，機内泊
- 9月22日（日） 広島到着

(3) 参加者の学校配置計画

本年度の「体験型海外教育実地研究」の授業には8名の大学院生が参加した。

参加院生の現地での学校配置並びに引率教員は以下のとおりである。

【ウォールコーツ小学校（K-5）】

参加者：西平由絃・横埜裕子

引率者：松宮奈賀子・渡邊巧

【C.M. エッペス中学校（6-8）】

参加者：青木理恵・頼望直

引率者：深澤清治・松浦武人

3. 第15回学校間交流国際フォーラムについて

2019年7月13日（土）に，広島大学大学院教育学研究科において，第15回学校間交流国際フォーラムを開催した。以下，フォーラムの概要を述べる。

フォーラムのテーマは，「学校間国際交流を通じた次世代グローバル教員養成(Next Generation Global Teacher Education through Overseas Teaching Practicum)」であった。

第1部では，「体験型海外教育実地研究2017参加者の意識変容について」，GPSCセンター長の深澤清治氏から「体験型海外教育実地研究2017参加者の意識変容について」と題した基調報告がおこなわれた。報告では，GPSCセンター設立の経緯，体験型海外教育実地研究の実施状況が紹介された。また，過去15年間に大学院生が開発した授業は，日本文化の「講義型」から米国の児童・生徒との「協働型」に移行してきたと述べられた。また，2017年度参加者の「英語力」や「やりとり能力」の変容について，アンケートの結果が紹介された。「コミュニケーション力」「多様性を受容し尊重するようになった」「チャレンジする勇気が伸びた」について顕著な伸びが確認された。今後の方向性として，「日米体験型海外教育実地研究モデル」を「異文化間・多文化間海外教育実地研究モデル」（グローバル教員養成）へ発展させていく可能性が示された。

第2部では，「体験型海外教育実地研究体験が日米の学校に与えたインパクト(The Impact of Overseas Teaching Practicum in Japan and the US)」について，日米の双方から話題提供がおこなわれた。

日本側の話題提供者は，2018年度参加者（天候不順のため，2018年9月は中止となった。2019年3月に希望者のみ渡航した。）の藤井志保氏（広

島大学大学院・広島大学附属三原中学校)、渡部真吾氏(広島大学大学院・新居浜市立東中学校)であった。両氏は、プログラムに参加した理由、開発・実践した授業の概要、体験型海外教育実習による自身の教育観や授業の変容について報告した。今回の“挑戦”によって教育観が広がったことや、地域に関わったり、ディスカッションをしたりといったアクティブラーニングの重要性への気付きが述べられた。

米国側の話題提供者は、ノースカロライナ州 C.M. エッペス中学校のトーマス・ヘネシー(Thomas Hennessey)氏、イクスプローリス中学校のコリー・グリル・バンクス(Cori Greer-Banks)氏であった。ヘネシー氏からは、グローバルマインドを持った、アクティブな生徒を育てるための授業実践について報告がおこなわれた。バンクス氏からは、プロジェクトベースドラーニングによるグローバル教育、社会科教育の実践について報告がおこなわれた。また、イクスプローリス中学校と広島大学附属東雲中学校の交流についても、グローバル教育の好例として紹介された。予測不可能な社会では、グローバルパートナーシップを通じてのみ、人類は持続可能な社会を築くことができると述べられ、国際交流の重要性が指摘された。

質疑応答では、アクティブラーニング(協働学習、プロジェクトベースドラーニング、サービ斯拉ーニング)の評価方法等について意見が交わされた。

総括コメントとして、前 GPSC センター長の小原友行氏は、5C's(好奇心:Curiosity, グローバル・コミュニケーション力(対話力):Communication, 協同(協働)的想像力:Creation, 人間関係形成力:Collaboration, 挑戦する力:Challenge)の必要性を提起した。その上で、2018年9月にC.M.エッペス中学校で実践した授業を報告した。

4 参加者の教材開発・報告

参加者(4名)は、国内での事前学習において、テーマ・題材等の設定・検討、和文学習指導案の作成・検討、英文学習指導案の作成・検討を行い、さらに、2019年7月14日(土)に開催した第15回学校間交流国際フォーラムでの研修、翌15日(日)に開催した授業研究ワークショップでの英文指導案・教材の検討(米国の教員によるコメント)を踏まえて、米国で授業を実施した。参加者が開発・

実施した授業の「授業テーマ」、「対象学年」、「授業の概要」、「成果と課題」、体験を通しての「自己の変容」を以下に示す。

【授業 A】 教職開発専攻 西平由絃

(1) 授業テーマ

Let's make Origami!

(2) 対象学年: 第4学年

(3) 授業のねらい

折り紙は、昔から今まで楽しまれてきた日本の伝統である。一枚の紙からさまざまな形を作ることができ、その技術はコーヒー缶のデザインや宇宙工学の設計にも使用されている。また、折り紙を折る過程で、お互いに教え合ったり、助け合ったりして他の人々とコミュニケーションをとり、仲を深めることにつながると考える。私は、アメリカの子どもたちに日本の折り紙にもっと興味を持ってもらい、折り紙を通して友達と交流する楽しさや良さを実感してほしいと考える。

そのため、本時の目標を「折り紙を折る活動を通して、日本の伝統としての折り紙の理解を深め、折り紙を通じた友達との交流の良さに気づく」とした。

(4) 授業の概要

- ① 導入では、パワーポイントを用いて折り紙がどんな遊びなのかを簡単に説明した。さらに、「折り紙を折ってみたい」という気持ちを持たせるために、本時でつくる作品(百面相)の完成版を児童一人ひとりに配付し、実際に遊んでもらった。
- ② 展開前半では、実際に百面相を折り始めた。初めて折り紙を折る児童もいたため、大きな折り紙を用意し折り方を前で示したり、工程ごとに途中まで折ってあるモデルを貼り付けたマニュアルを班ごとに用意したりして、折り紙の折る工程を視覚的にわかりやすくした。
- ③ 展開後半では、教師の演示は見せずに児童どうしで協力して折り紙を折らせた。その際にマニュアルを使いながら、上手くできた児童にはまだできていない児童に折るのを手伝ってあげるように声かけをしまわった。
- ④ 終末では、日本の児童が一言メッセージを添えて作った折り紙作品(ハローフォックス)をアメリカの児童にプレゼントし、集合写真を撮った。その際、日本の児童が折り紙を折っている様子をスライドで見せ、気持ちを込めて折っていることがわかるようにした。

(5) 成果と課題

Wahl-Coates で4年生を対象に、Artの時間をいただいて「折り紙」の授業を行った。今回の実践の成果と課題について述べる。

まず、成果について述べる。授業をする上で、言葉の壁が存在しながらも子どもたちはとても積極的に授業に参加していた。「今日は折り紙をします。」と言った後の子どもたちの反応はとても嬉しそうにしていた。中には折り紙を見たことも折ったこともないという子どももいたが、授業の導入場面で今回つくる作品を用いて遊び方のモデルを示したり、実際に触って遊ばせたりすることで、子どもたちの「作ってみたい!」という気持ちを生むことができた。さらに、授業の最後には、日本の子どもたちからの作品をプレゼントとして渡すと、お返しにメッセージを書いて日本の子どもたちに渡してほしいという児童がいたことから、折り紙を通して日本の子どもたちとつながりたいという気持ちを少しでも持たせることができたと考えた。

課題としては2点ある。1点目は、自由な発想が許されるものとは違って、題材が「折り紙」であったため、子どもたちが創造的に思考する場面をつくるのが難しかったことである。初めて折り紙をつくる子どもがいたことに加え、学年が4年生であることから折り紙で作品をつくるので精一杯になってしまった。もっと子どもたちが思考できる場面を授業の中に組み込むこと、そして創造的な思考を生みやすいような題材を選ぶことがとても大切であると感じた。2点目は、時間の都合上振り返りの場面を設けることができなかったことである。折り紙を折ることを通してどのように他の友達と協力したか、折り紙を経験してみてどんな気持ちだったかなど、子どもたちが授業を振り返る時間をつくるで子どもたちが何を学んだのか授業者側からも授業を評価することができたと考える。

(6) 自己の変容

本実践を終えて、「発想の転換」がとても大切であることを学んだ。例えば、言葉の壁があったとしても、逆に言葉の壁があるからこそ充実した視覚的な手立てを考えることができた。また、異文化の相手だからこそ、異文化でもわかりやすい説明や活動内容を考えることにつながった。一見難しく見える状況でも見方や発想を変える柔軟な思考が大切であると実感した。今後の教育活動にもこの柔軟な思考を生かしていきたいと考える。

【授業 B】 教職開発専攻 槇埜 裕子

(1) 授業テーマ

Let's learn about Japanese lunch time and how to use chopsticks well.

(2) 対象学年：第4学年

(3) 授業のねらい

食事は、生きていく上で欠くことのできない営みである。誰もが日々当たり前にとっての食事だが、地域や文化の違いによって、食材や食べ方は様々である。学校給食も同様に地域性が表れる。そこで、本授業において児童が日本とアメリカの給食時間の様子を比較することで、献立や食べ方の相違点・類似点に着目させ、さらに箸を使う活動を通して、食を介した異文化理解を図ることをねらいとした。

(4) 授業の概要

- ① 導入では、スライドショーを用いて自己紹介を行い、勤務校の様子について話した。さらに、子供が給食を食べている様子を提示し、献立や箸、給食を食べる場所などへの興味付けを図った。
- ② 本時のめあて「日本の給食を知り、箸の使い方を学ぼう」を確認した後、①給食準備②給食を食べる③後片付けの3場面の映像を見せ、さらに詳しく日本の給食を共有した。この時、「いただきます。」や「ごちそうさまでした。」という食事前後の挨拶に気づかせ、アメリカの子供たちと一緒に練習した。さらに1週間の献立を写真とともに提示し、おにぎりやみそ汁など日本を代表する食事だけでなく、季節の献立や洋食も出ることを確認した。
- ③ 映像を通して知った日本の給食の様子と、自分たちの給食の様子を比較させ、相違点や類似点を発表させた。すると、日本では頻繁にみそ汁が出ていることや、毎日牛乳が出ていること、さらに日本では箸を使って食べるが、自分たちはフォークやスプーンを使って食べることなど、多くの気づきを交流することができた。
- ④ 箸への興味を高めた子どもたちに、日本の子供たちが作った箸入れに入った箸を配り、使い方を説明した。上の箸の持ち方、下の箸の持ち方を確認した後、2本の箸を持ち、上下に動かす練習をして、実際に丸く柔らかい綿を挟み持ち上げる練習を繰り返した。
- ⑤ 一人一人に豆が入った紙皿を配り、豆をつまむ練習をした。しかし、難易度が高かったため、なかなか上手に持ち上げることができず、子

供たちは苦戦しているようであった。しかし時間いっぱい粘り強く練習していた。最後にお箸ゲーム“として、制限時間1分間で豆をつまみ皿に移す活動を行った。上手に箸を使う子供もいたが、全くつまみ上げることができなかった児童もいた。しかし楽しく活動することができた。

(5) 成果と課題

本時の成果は二点挙げられる。一点目は題材を“給食”にしたことで子供の興味を高めることができた点である。自分たちの給食と日本の給食を比べることで違いに気づき、何度も驚きの声があがった。異文化を知ることが子供たちにとって良い刺激となったと感じた。二点目は“聴く・見る・体験する”という色々な活動を取り入れた点である。特に箸を使ったことが実感を伴った異文化理解につながったと考える。

課題は二点挙げられる。一点目は、私の語学力が低く子供たちの質問に答えきることができなかった点である。そのため、日本の給食に関する子どもの興味や関心の高まりを妨げてしまった。二点目は個人差に対応しきれなかった点である。箸を使った経験の有無により豆をつまむ活動で大きな差が出た。つまむ対象の難易度を考えておく必要があった。

(6) 自己の変容

研修に参加する前は外国語に対して苦手意識があり、英語を学ぶことに抵抗があったが、研修を通して、自己の英語力の低さを痛感するとともに、英語圏の人と自由にコミュニケーションしたいと思うようになった。そして、言語能力を高めることで、文献だけでなく現地の実践を直接見たり生の声を聴いたりする中で、他国の教育について理解を深めていきたいと考えるようになった。

今までの私は、未知の世界に挑戦することに対して不安が大きく、海外で現地の児童に授業をすることや現地の先生方と話すような研修に自ら参加しようとは考えなかったが、このような機会は今後ないだろうと思い、思い切って参加を決めた。現地に行くからこそ分かることや感じることなど想像していた以上の学びがあった。自分で作っていた壁を崩したことで、少し自信がつき、見ることをあきらめていた世界を見てみようという意欲がわいた。参加したことにより私が得たものは測り知れない。この経験を今後の指導に生かしていきたい。

【授業 C】 教職開発専攻 頼望直

(1) 授業テーマ

Let's make “Hanko”!

(2) 対象学年：第6学年

(3) 授業のねらい

本授業のねらいは以下の2つである。

- ① ハンコ（印鑑）は日本文化として深く根付いており、現代においてはサインの代わりに印鑑を使用するのも世界広しといえど日本のみである。そんな、ハンコ（印鑑）について知ることを通して日本文化を学んでもらい、自分のハンコを作り、実際に使ってみることを通して、日本文化に触れ、自他国の文化について考えることを目指した。
- ② 手紙を通して日米の子ども達の交流を行い、他国の人とつながる喜びを感じさせ、異文化への興味を育むことをねらいとした。

(4) 授業の概要

- ① 最初に自己紹介を行い、世界地図を提示して、日本の位置を確認しつつ、そこから来たことを伝えた。また、日本の文化について伝え、一緒にお互いの文化について考えたい旨を伝えた。
- ② 実際の印鑑を見せたり、写真でも提示したりしながら、ハンコ（印鑑）の歴史に触れたり、その種類や場面に応じた使い方、アメリカの文化に馴染みのあるサインとの違いなどを伝えた。
- ③ 自分のオリジナルハンコを作る活動を行った。ハンコの字はカタカナを用いたため、作る前に日本語についての説明も行った。カタカナで名前が表記してある台紙を配布し、子ども達に紐を切って凸を作らせて、ハンコを制作させた。
- ④ ハンコ作りが終わった子から順次、日本の子ども達からの手紙を渡した。自分自身やアメリカのことについて触れるよう伝え、返事の手紙を書かせた。手紙の最後には、サインの代わりに自分のハンコを使わせた。

(5) 成果と課題

本授業の成果は2点ある。1つは、アメリカの子ども達に日本文化を知ってもらい、また実際に触れてもらったことである。ハンコはもちろんのこと、別途持参した日本のお金（札・硬貨全種類）や折り紙、竹とんぼ、コマなど日本ならではのものにたくさん触れてもらった。子どもたちは自分の今まで体験したことのないものに興味を示し、使い方を考えたり、なぜ硬貨に穴があるのか不思議

議がったり、折り紙アートに感動したりしていた。もしかしたらインターネットなどで見て知っているものもあったかもしれないが、実際に本物を目にし、触れることができたことで、異文化への興味を強く持ってもらえたのではないかと思う。

2 つ目は、授業を通して、日本の小学生とグリーンビルの中学生が手紙を送り合って、交流を行ったことである。グローバル化が進み、海外のことを簡単に知り、情報を入手できる時代になっているものの、普段生活している中で、異国の地の人と交流することのできる機会は多くない。そこで、両国の子ども達は手紙を通して交流することで、一生懸命お互いのことや自分の住んでいる地域、国のことについて伝え合ったり、手紙の内容から教師に色々な質問をしたり、自ら調べてみようとする主体的に異文化について理解し、学ぼうとする姿が見られた。手紙という間接的な形ではあったが、日米の子ども達が交流を持ちえたことが、今回の私の体験型海外教育実地研究の一番の成果であると考えている。

課題は、授業の中で思考させたり、それを交流させたりする時間を持てなかったことである。思考させるための質問内容はあらかじめ用意していたのだが、交流の手紙を書く活動に時間がかかりすぎてしまったため、意図的な思考と交流の場を設けることができなかった。タイムマネジメントも課題として残った。

(6) 自己の変容

アメリカで出会った人たちは前向きに考える人が多く、そんな彼らからポジティブに物事を捉え、そしてそれを言葉にして出す大切さを学んだ。教師として子どもと関わる際、大切にしたい姿勢、行動である。なので、自分の授業の中でも肯定的な声かけを多く取り入れるようにした。子ども達がハンコを作っている際の机間指導も褒め言葉や励ます言葉を多く発するよう心がけた。そのように授業を実践する中で、日本でもアメリカでも子どもは同じなのだと強く感じた。褒められれば喜ぶし、励ませば頑張るし、興味を持って積極的に関わればそれに応えてくれる。そこに言葉や文化の壁はない。いままで私は異文化や他国のことを理解する際に、それぞれの相違点に目を向けがちであったが、そこには共通点もたくさんあり、そこにも目を向けていくことでお互いに共感を持ち、本当の意味での相互理解になるのだと思った。

【授業 D】 教職開発専攻 青木理恵

(1) 授業テーマ

Let's make "Kagura Men"

(2) 対象学年：第 8 学年

(3) 授業のねらい

石見神楽は地域の伝統芸能でありながらも、2019 年に日本遺産に登録された。これに触れることは、歴史や風土を総合的に知ることができ、日本の文化を深く理解することにつながる。そこで、神楽を通して、日本の郷土芸能に触れ、異文化を理解するとともに、アメリカと日本との共通する部分に気づくことをねらいとした。また神楽は、面や舞など、非言語要素による表現を含むものも多くあることから、お面作成や表現活動を通して、言葉以外のもので自分の考えを表現し、他者に伝えるコミュニケーションスキルの育成も目指した。

(4) 授業の概要

- ① 神楽についてその特徴を見出し、その歴史や込められた思いについて学習する。
- ② 神楽の魅力は何か、動画を視聴しながら見出す。
- ③ 神楽面に施されている工夫について学習する。
- ④ オリジナル神楽面を作成する。
- ⑤ 作成した神楽面を被り、神楽の曲に乗せて披露する。



写真 1 神楽面を作成しているようす



写真 2 神楽面を披露しているようす

(5) 成果と課題

授業のはじめに、日本についての質問を行ったところ、日本という国を知っているもの、実際に訪れた生徒はおらず、また神楽を知っていると答えた生徒もいなかった。神楽の動画を視聴すると、様々な質問が飛び交い、興味を持ったものの、実際にできるのかという不安の声が上がった。

授業では、神楽への理解を深めるためにクイズを多く取り入れたところ、多くの挙手が見られ、答えたがる生徒も見られたことから、神楽への興味とともに理解が深まっていったと考えられる。作成の場面では、神楽の特徴を踏まえつつも自分自身のオリジナル性を取り入れたお面を作成していた。インタビューを行ったところ、それぞれが工夫したポイントを発表することができた。また、披露する場面では、作成したお面の世界観を表現するために、道具等も使いながら神楽の音楽に合わせた舞が見られた。

授業の最後では、「Do you enjoy Kagura?」という質問に対し、「Yes!」という大きな返事が返ってきた。これらのことから、神楽を通して日本を身近に感じさせることができたと考える。

また、授業前はずっと音楽を聴いていたが、授業後になると神楽について熱心に質問をしてきた生徒がいた。担任の先生によると、この生徒はコミュニケーションが苦手で、自分のことを開示することが上手にできない生徒であった。この生徒は堂々と音楽に合わせて皆の前で舞うことができたことから、今回の授業では、コミュニケーションスキルの育成にも効果があったと考える。



(6) 自己の変容

今回の経験から、非言語コミュニケーションの大切さについて気づかされた。私自身英語は得意ではなかったが、ジェスチャーなどを交えることで、アメリカの生徒たちと授業を通して通じ合えることができた。また、それと同時に言葉が通じなくても生徒に学ばせることができるという自信にもつながった。これらのことは、今後の教員生活において非常に大きな財産となり得るであろう。

5 本年度の授業の整理と考察

(1) 本年度の授業

本年度、参加院生が開発した授業は、いずれの授業も導入において日本の文化に対する理解を図りながら興味・関心を引き出した上で、その後体験活動（A：折り紙を折る、B：箸で綿を持ち上げる、豆をつまむ、C：オリジナルはんこを作る・手紙に押印する、D：神楽の面を作る、神楽を演じる）の場を設定している。日本の文化の理解を図るだけ（日本文化紹介・伝授型の授業）でなく、対象学年の発達段階に応じた教材開発の工夫を通して、米国の児童生徒が日本の文化を実体験する場を構成すること（日本文化体験型授業）ができたことは、一つの成果である。また、授業Aでは折り方を考える場を設定する、授業Bでは日本の学校給食と米国の学校のランチを比較する場を設定する、授業Cでは日本の児童への手紙を作成する場を設定する、授業Dでは神楽の踊りを考える場を設定するなど、日本の文化の理解を踏まえた思考・表現の場、創造的な活動の場を設定すること（文化比較型授業、文化創造型授業）ができたことも成果としてあげられる。さらに、授業A、B、Cにおいては、日本の文化を媒介とした日米の児童生徒の交流（文化交流型授業）を実現している。

これらの成果は、事前学習において、過去の体験型海外教育実地研究の授業を考察する機会をもったことで、日本文化紹介・伝授型の授業から日本文化体験型授業、文化比較型授業、文化創造型授業、文化交流型授業へと、院生の授業観の変容を促すことができたことによるものととらえている。

(2) 自己の変容

参加院生の「自己の変容」の報告から、体験型海外教育実地研究が、院生にとって、以下のような認識の変容を促すものであることが分かる。

- ・他国の文化や教育について理解することの大切さを認識する。
- ・異文化の中にある共通点を認識する。
- ・言語能力(外国語)を高めることの大切さを認識する。
- ・言語的表現を補う表現の工夫、非言語コミュニケーションの大切さを認識する。
- ・積極的にコミュニケーションを図ることの大切さを認識する。
- ・ポジティブに思考・表現すること、柔軟に思考することの大切さを認識する。

・肯定的評価(褒め言葉, 励ます言葉)の大切さを認識する。

これらの認識の変容は, グローバルマインドを有する教師の資質能力の形成に資するものであると考える。

6 おわりに

本実地研究は, 教育学研究科の授業としては本年度が最後となる。これまでに参加した100名以上の大学院生は, 修了後, 日本各地の教育現場で活躍している。今後, 日本の教育事情も訪日外国人や居住外国人の増加によって, 多様化に対応することが今以上に求められていくであろう。その際に異文化への寛容性や自分とは異なる価値観を持つ人々との共生能力をどのように育成するのか, またそのような視点を学校教育でどう育成するのかは教師の資質能力に負うところが大きい。本プロジェクトはこれまで日米という場面を基点としてきたが, 今後はそれ以外の地域・文化との交流も視野に入れながら, この実地研究が発展していくことを担当教員一同, 期待したい。

[参考文献]

- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007, pp. 43-56.
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻, 2008, pp. 39-53.
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp. 95-104.
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, pp. 155-168.
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅴ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp. 129-140.
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅵ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp. 259-269.
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅶ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第20巻, 2014, pp. 161-181.
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅷ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第21巻, 2015, pp. 143-161.
- 深澤清治・小原友行・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅸ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第22巻, 2016, pp. 251-268.
- 小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅹ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第23巻, 2017, pp. 103-116.
- 朝倉淳・深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅺ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第24巻, 2018, pp. 131-148.
- 深澤清治・松浦武人・松宮奈賀子・渡邊巧ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅻ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第25巻, 2019, pp. 109-118.